国立国語研究所学術情報リポジトリ

不正確な引用：日本語日常会話における複合助詞「とか」による語りの構造化

メタデータ	言語:
	出版者: 国立国語研究所
	公開日: 2024-01-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 臼田, 泰如
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000152

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 26: 1–15 (2024) Licensed under CC BY-ND
ISSN 2186-1358

不正確な引用
――日本語日常会話における複合助詞「とか」による語りの構造化――

臼田泰如

静岡理工科大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本研究は日常会話において，参与者が過去に経験した出来事を時系列的に語る「物語」の語りにおける複合助詞の「とか」の分析を行う。「とか」は「A とか B とか」の形で，類似のものを並列的に列挙する用法があるほか，会話などにおいては断定・明言を避ける対人配慮的な用法があるとされてきた。一方，近年ではそうではなく，評価の際立ったものの集合の中から一例を取り出して提示する「卓立的例示」と呼ばれる用法が見られることが指摘されてきている。本研究では，この「卓立的例示」に類する用法のうち，物語の語りの中に生じ，引用を導くマーカーとして使用されている例を『日本語日常会話コーパス』を用いて収集した。本研究で明らかにしたのは以下のことである。物語の語りにおける，引用を導く「とか」も「卓立的例示」の一種と見なせる用法が多く見られる。その上で，物語における出来事の推移に沿って，時系列的に先行するものごとに対して，後続することがらを際立たせるという構造の中に生じることがわかった。またそうした働きは,「とか」のもつ不正確さの含意の作用であることが示唆された *。

キーワード：語り，「とか」，引用，日常会話，『日本語日常会話コーパス』

1. はじめに

日本語の会話ではしばしば,「とか」という複合助詞（砂川 1987）を用いて，話題のものごと，特に第三者や自分自身の過去の発話，あるいは仮想的な発話を引用するふるまいが見られる。たとえば次の会話断片（データ 1）のようなものである [1]。

データ 1［会話 ID: C002_004 470.075 秒 –491.565 秒］

1　B　僕な：きのうさ：

　　(2.2)

2　B　バイト中さ

　　(1.7)

3　B　あの がｈきｈんｈちょｈがｈさｈ ((A ミニトマトを口へ))

* 本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」（プロジェクトリーダー：小磯花絵）の研究成果である。また日本学術振興会科学研究費若手研究「日常会話コーパスを用いた「課題」に基づく会話の分析：定量・定性の両面から」（課題番号：JP20K13019）の助成を受けて行われた。本稿の内容は, 2022 年 2 月 22 日の NINJAL サロンにおける発表「『日本語日常会話コーパス』における引用形式による語りの構造化」に基づいている。

[1] 掲出するデータにおける個人名などは，『日本語日常会話コーパス』の仕様に基づいて仮名化されている。会話分析の慣習に則り，『日本語日常会話コーパス』において付与されている仮名化箇所を示す記号は本稿では付していない。

4 A うん
(0. 8)
5 B なんか (0. 9) ここ何時までやってるの？ ずっとやってるの :? みたいな .
(0. 2)
6 B あの まあ親子連れだったんだけどさ .
(1. 3)
7 -> B ず – (0. 3) うん 二十四時間ずっとやってるよっつったら なんで : とか [ゆってｈ
8 A [hah haha
9 B め [んどくせ .
10 A [なんて答えた .

データ 1 は，B が普段従事している，とあるホテルの中の 24 時間営業の売店でのアルバイトで遭遇した出来事を，自宅で母親である A に語っている会話断片である。3 行目の「がｈきｈんｈちょｈ」は，夜の 9 時ごろに来店した「親子連れ (6)」[2] の子供であり，その子供が 5 行目の質問をアルバイト中の B に投げかけた (5)。その質問に対して B は 7 行目の前半の応答を返すが，するとその子供は 7 行目後半のさらなる質問を繰り出してきた，という一連の出来事が語られている。

この語りの直後の 9 行目では，そのやりとりについての B の態度が例示的に表出されている。この態度を例示する B の発話により，B がここで再現されたやりとりをどのようなものとして理解したのかが示されている。つまり，B は最初の質問 (5) に対して端的に事実をもって答えたのに対し，さらに疑問が投げかけられたことについて「めんどくせ (9)」と感じたと述べている。そして，その「めんどくせ」事態の核心をなす，つまりこの語りのパンチラインである，ふたつめの疑問の引用において「とか」が用いられている。

「とか」は従来，「A とか B とか」のような形で類似のものを並列する表現を作るために用いられるものとして扱われてきた。これに対し，並列的な構文を作らず，類似のものが他にもある（「一部例示」）ことを示すのでもない「卓立的提示」という用法は，比較的近年において主に「若者」に用いられるとされる（天野 2001）。こうした用法のうち，特に第三者や自分自身の発話を引用するマーカーとして用いる用法についてはあまり研究されておらず，とりわけ実際になされた会話に基づき，会話の中でのふるまいを経験的に分析した研究は管見の限りなされていない。本研究の目的は，「とか」というマーカーを用いた発話によって会話の中で何が達成されているのかを，個別の会話を質的に検討することにより明らかにすることである。

加えて，本研究では，日常的な会話の中で人々がしばしば行う「物語（storytelling）（Jefferson 1978, Mandelbaum 2012）」と呼ばれるふるまいにおいて生じる場合に着目する。物語とは，それを語る参与者が過去に遭遇した，あるいは見聞きした出来事について，時系列的に順を追って話すことをいう。物語が語られるときには，語り手（teller）は，いまから物語を語りつつあるとい

[2] 鉤括弧は原則的に会話断片からの引用を示す。丸括弧内の数字は会話断片の行数を表す。

うことを示すものとして，いつどこで遭遇した出来事なのか，どのような出来事なのかといったことをあらかじめ示す preface という要素を冒頭に配置することや，そのようにして物語が開始されると，物語の受け手（receiver）は，通常のターン交代システムを停止し，ターン交代が通常なら可能であると考えられる連鎖成分が生じてもターンを取得せず，受け手としての反応を返すにとどまることが指摘されてきた（Sacks 1992, Mandelbaum 2012）。物語は，通常のターン交代システムに従って産出される発話連鎖に比べて，語り手による語り全体についてのデザインに基づいてなされるといってよく，それゆえ物語を構成する発話のひとつひとつもある程度，全体における位置づけに指向してデザインされる。本研究では物語において，語の構造や出来事の推移と関連して「とか」が用いられていることを論じる。

2. 先行研究

「とか」は従来，類似のものを並列する構文を作る文法要素として扱われてきた（寺村 1991，森山 1995）。これに対し，並列的に用いない用法にも近年は焦点が当たりつつあるといえる（天野 2001，中俣 2008，大和 2010，劉 2011，洞澤・奥村 2015，住吉 2015，山下 2017）。

このうち，1 で言及した天野（2001）では，並列的用法以外で単独で使われる用法として，対人配慮的な「断定回避」の用法を従来のものとして挙げ，これと対置して近年の用法として「卓立的提示」を挙げている。天野（2001）は 2000 年シドニーオリンピックにおける選手へのインタビューの中で見られた例として「銅メダルとか取っちゃって」というものを挙げ，「若者世代に拡張されている「とか」には，「ぼかした言い方・自信のない言い方」ではなく（p. 104）」「評価の際立ったものが集合として想定され，その一部例示（p. 105）」がなされる用法であると述べている。

また，中俣（2008）は並列の「とか」と，とりたて助詞の「も」との用法を比較している。「も」はすでに話題に出ているものごとの集合から話題のものを取り出すのに対し，「とか」は新情報であっても用いられるとする。また，類例の集合のうちのひとつを取り出していることが容易に想定される場合だけでなく，類例が想定しにくいものについても用いられ，「なんか」と交換可能な場合があると述べている。加えて，「なんか」と異なり，「とか」にはとりたてられたものについての否定的評価のニュアンスはないとしているが，この点について住吉（2015）は，「一般的に話し手にとって不利である事柄（p. 69）」が後続するという傾向があるとし，「話し手の予想や期待から外れる事柄」を導く「意外性の「とか」」として位置づけている。

一方，住吉（2015）には引用マーカーとしての「とか」に言及があるが，「引用用法」として括り出し，「意外性」や「ぼかし」といった用法とは区別しており，また主たる議論の俎上に上がっていない。そのため，引用に用いられる「とか」がどれに該当し，どれには該当しない，あるいは別の意味や効果を持つのかといったことも述べられていない。

このような議論を踏まえて，本研究では，これまで中心的な位置づけを与えられて来なかった引用マーカーとしての用法に焦点を当てる。引用マーカーとしての用法には，これまで述べられてきた用法が会話の中で引用に用いられる場合にも当てはまる部分が多い一方で，これまでには

十分議論されてきていないと考えられる特徴も見られる。本研究の目的は，そのような引用マーカーの「とか」が，物語の構造や理解可能性において果たしている役割を明らかにすることである。

3. データと方法論

本研究で扱うデータは，国立国語研究所によって構築・公開された『日本語日常会話コーパス（CEJC）』（小磯ほか 2022）である。CEJC は日常生活における会話の多様性をできるだけ反映し，さまざまな研究に利用可能な形で提供するため，音声および映像と文字起こしテキストを利用可能な形で提供するほか，以下のような特徴を備えるよう設計されている。

- 200 時間分の会話データ
- 年齢・性別・属性・会話の種類の均衡性を考慮
- 形態論情報（品詞，文中の位置，発話時間など）をはじめとするアノテーションを付与

上記の自然会話データについて，会話分析（conversation analysis, Sacks et al. 1974, Schegloff 2007）の方法論にもとづく分析を行う。会話分析とは，「人が日常生活の中で従事する多種多様な実践的諸活動――会話，会議，診察，面接，ゲーム，授業，接客等々――を構成する出来事や人びとの振る舞いが，いかにしてその場で常識的に合理的な理解可能性を備えるものとして成立しているか，この秩序を産出するための社会成員の「方法」（Garfinkel 1967）を，発話をはじめとする相互行為中の振る舞いの観察を通じて明らかにする」方法論である（平本 2018: 2）。我々はやりとりを行いながら日常のさまざまな活動を行っている。そうした活動の中のやりとりに用いられることばや身振りなどのふるまいは，すべてがそうではないにせよ，その活動を構成するひとつひとつの行為や活動全体を成り立たせるための参与者の指し手になっているものを含んでいる。会話分析が採用する分析方針は，どのようにしてそうしたふるまいが行為を構成する指し手になっているのかを明らかにすることである。

4. 分析

ここまでの議論を踏まえて，『日本語日常会話コーパス』から取得した会話断片について，物語が語られている場面における非並列用法の「とか」の分析を行う。

まず，冒頭のデータ 1 を再掲する。

データ 1［会話 ID: C002_004 470.075 秒 –491.565 秒］（再掲）

1 B 僕な： きのうさ：
(2.2)
2 B バイト中さ
(1.7)
3 B あの がｈきｈんｈちょｈがｈさｈ ((A ミニトマトを口へ))
4 A うん

(0.8)
5 B なんか (0.9) ここ何時までやってるの？ ずっとやってるの :? みたいな .
(0.2)
6 B あの まあ親子連れだったんだけどさ .
(1.3)
7 -> B ず - (0.3) うん 二十四時間ずっとやってるよっつったら なんで : とか [ゆってh
8 A [hah haha
9 B め [んどくせ .
10 A [なんて答えた .

冒頭においても述べた通り，データ 1 は B が自身のアルバイト中に起きたやりとりについて A に語っている会話断片である。語られているやりとりにおいて，B は 7 行目の前半の「二十四時間ずっとやってるよ」を，事実に基づき，同様の事態が広く見られる，通常のものとして発話したのに対し，それに続く位置で発された「なんで :」という，さらなる質問が投げかけられたことが，やりとりにおける中心的なことがら，つまりパンチラインとして提示されている。7 行目がパンチラインとして扱われていることは，その直後の 8 行目において聴き手の A が笑っていることからも見て取れる。

データ 1 においてはそのパンチラインが「とか」でマークされている。この「とか」によるマークは当該の発話を卓立させている。さらに，パンチラインの直後，一連の出来事に関する語り手のコメントが配置される位置（臼田 2021）において，「めんどくせ (9)」という発話がなされている。このことから，当該のパンチラインは，ごく当然の受け答えとして発された 7 行目に対し，そうした通常の処理の範囲を逸脱したものとして（それゆえ「めんどくせ」ものとして）理解され，語りとして再構成されているといえる。つまり，「とか」はここでは，時系列的な物語の進行に沿って，ごく通常のものごとに継起して生じた，通常の範囲を逸脱したものごとをマークするのに用いられているといえる。

データ 1 のように，物語のパンチラインに続く位置で語り手のコメントが発せられ，それによって語られた一連の出来事における，パンチラインによって表されることがらの逸脱性に関する語り手の理解が示されている事例はほかにも見られた。次のデータ 2 では，A と B の共通の知人の「凛ちゃん」についての物語が B によって語られている。B は，「凛ちゃん」が「ベジタリアンになった」ことによって「去年の暮れに会った時にすっごい激痩せして (2)」いたという事態を，そのときのやりとりの再現を交えて語っている。

データ 2［会話 ID: K001_008 237.034 秒 –311.561 秒］
1 B 凛ちゃんが :
(1.6) ((A 咀嚼しつつ頷き))
2 B 去年の暮れに会った時にすっごい激やせしてて :
(0.3) ((A 大きく頷く))

3 B 病気じゃないかと思うくらい [痩せてたの↑ね
4 A [うん
(32 秒略：B が「凛ちゃん」がベジタリアンになったこと，その実践内容について)
29 B で そんなに痩せてて (.) げ－ (0.5) あの
(1.4) ((B 右掌を自分に向け，縦に振る))
30 B だいじょぶなのかと心配し
(0.5) ((A 大きく数回頷く))
31 B てしまって：
(1.5)
32 B で なんか
(1.8)
33 B だいじょぶ？ってゆったら大丈夫 (.) ってゆんだけど：((A 頷く))
(0.4)
34 A 何がきっかけだったの？
(1.5)
35 B なんか体調が：あんま [り：
36 A [うんうん ((スプーンを口に運びながら))
(0.6)
37 B やっぱりよくなくて：(.) ってゆってて：((A 2 回頷く))
(0.4)
38 B で もともと太ってる子じゃないのに：
39 A うん。
(2.3) ((AB ともにスプーンを手元の皿の中で動かす))
40 -> B なんか痩せた：とか言ってるから (0.8) いや いや いや 痩せないほうがいいんじゃない？
みたい (な). ((A スプーンを口へ))
41 A uhuhuhu

データ 2 では，37 行目までのやりとりにおいて，主題の人物である「凛ちゃん」についての背景的情報や，B が会った時の出来事などが語られ，続く 38 行目において物語の焦点となるやりとりが提示されている。このやりとりの提示において，38 行目では「凛ちゃん」に関する B が認識していた事実（「もともと太ってる子じゃない (38)」）が示され，それに逆接する形式（「のに (38)」）をとって 40 行目前半の「なんか痩せた :」という「凛ちゃん」の発話が引用されている。直後の 41 行目において A が笑っていることからも，この引用発話がこの物語のパンチラインであると見ることができる。そしてここでもデータ 1 と同様に，当該の引用発話に対し，語り手である B のコメントが直後に配置されている (40)。

データ 2 では，40 行目前半の「なんか痩せた :」という発話の引用が「とか」でマークされて

いる。この引用は，直前の38行目において示されている事実に対して逸脱的な事態であることが，38行目の逆接の形式によって表されている。ここではそのように逆接された引用が，「とか」でマークされており，物語のパンチラインが，その前提となる事実に対して逸脱的であることが強調される形で卓立されているといえる。

ここまでの観察において，「とか」による引用が物語のパンチラインにおいて出現し，それに先行する部分において示されることがらに対して，ある種の逸脱的なものとして提示されていること，それが「とか」による卓立を受けていることを見てきた。類例をほかにも見ておきたい。データ3は，互いに配偶者であるAとBが自宅でダイニングキッチンにいるときに交わされた会話の一部である。Aはテニスクラブの支配人をしており，「美穂ちゃん」および「大津さん」はそのクラブのメンバーであり，Bもある程度の面識があるとみられる。この断片に先行する部分で，「大津さん」らはテニスクラブにおいて「小太りおっさんチーム」であると「美穂ちゃん」が見なしていることが述べられ，その枠にAも含まれていることが述べられており，Aはそれについて納得していないことが，冗談めかされながら語られている。また，この断片の直後，Aは「大津さん」について「体重百キロ以上あると思う」「背は俺よりちょっとちっちゃい」と説明している。

データ3［会話ID: S001_011 441.136秒–455.224秒］

((ダイニングキッチンにて，AはテーブルについてBのほうを向いている。Bは少し離れた流しで片付けをしており，Aを見てはいない))

1　A　で こないだ その ある女性とさ：
2　B　うん
　　(0.2)
3　A　こうゆう ちょっとヒッティングパートナーみたい (に打って) たらさ：
4　B　うん
　　(0.5)
5　A　遠くから美穂ちゃんがさ：
　　(.)
6　B　うん
7 -> A　あれ大津さんが：
　　(0.7)
8　B　ehh [hh
9 -> A　　[やってんのかと思った： [とかゆわれて.
10　B　((僅かに呼気，笑い継続))　[hahahahaha ((笑い終わりにAを一度振り返る))
11　A　うっそだろうとか言って.
12　B　¥ひ：どいね¥.

Aが「美穂ちゃん」によって「大津さん」と同じカテゴリーに入れられていること，それがA

にとって不満であることが語られた上で，データ 3 の具体的なエピソードの語りがなされている。テニスクラブの活動として，A が「ある女性と」「打ってたら」という，出来事の前段部分が提示される。この出来事の前段部分は「たら」という順接形式で提示されている。その部分に引き続いて起こったことがらとして，「遠くから美穂ちゃんが (5)」「あれ大津さんが (7)」「やってんのかと思った : とかゆわれ (9)」た，という事態が提示されている。この 7 行目および 9 行目がこの物語におけるパンチラインであるといえ，それは 8 行目および 10 行目の B の笑いによっても，当事者によってそのように理解されていることが確認できる。

この物語においても，通常の事態に対して，逸脱的な事態が引用の形で提示される際に「とか」によるマークが用いられているといえる。クラブの通常の活動としての活動を行っていたことがら (3) に対して，A 自身が納得していない A についての「美穂ちゃん」の認識がパンチラインとして提示されている。そのような，A にとっては自然には予想されない認識に基づく発話の引用が「とか」によってなされている。

その上で，データ 3 がデータ 1 および 2 と表層的に異なって見えるのは，11 行目の A 自身のコメント，あるいはその時点での A 自身の発話の再現と見られる引用も「とか」によってマークされていることである。つまりここでは，7 行目から 9 行目の引用された発話の逸脱性についての A 自身の理解も，卓立に値する発話の引用として提示されている。これによって，ここでは 11 行目も出来事の一部として，パンチラインの一部をなすものとして位置づけられていると見ることができる。

次のデータ 4 でも，語りのパンチラインをなす引用が「とか」によってマークされている。データ 4 のやりとりは，C は生まれてからずっと現在住んでいる地域で暮らしているにもかかわらず，隣の地域の人々の中には知らない人もいるといい，同様に C のことを知らない人もおり，「あんた どこの人 ?」などと頻繁に尋ねられていたという話が語られている。データ 4 はその続きの会話断片である。

データ 4［会話 ID: K009_008 792.103 秒 –803.152 秒］

1 C (黒井商会) の (邦世) さんがゆったもん。
(0.2)
2 C あんたさ : (.) ここ住んで生まれ育ったのに何やってんの わかんないの .
3 C 知らない [あすこの嫁さんなんか知らない 見たことない 聞いたことない 会ったことないとかゆったら
4 B [うん
(0.3)
5 C なんとかさんちの (0.4) む – [嫁さんだよ : とか (って).
6 A [hhhuhu
7 C おー そうなんだ .

断片において C が再現しているのは，C のことを知っていた地域の人と，知らなかった人と

のやりとりである。2 行目で，C のことを知っていた人が，知らなかった人に対して，自分が深く関わっているはずの地域の住人である C のことをなぜ知らないのかと問いただすと，知らなかった人は C のことを知らないという旨の応答を「知らない あすこの嫁さんなんか知らない 見たことない 聞いたことない 会ったことない (3)」と，極めて repetitive な形で強調して行ったことが再現されている。これにさらに応答した発話として 5 行目の再現も行われている。この 3 行目と 5 行目が「とか」によってマークされている。すなわち，2 行目に示された，知っていることが当然と考えられる地域の住人を知らないのかという問いただしに対し，極めて強い形式でなされた，知らないという逸脱的な応答，および，その応答に対して，人物の同定についての順当な過程（それゆえ，その過程を辿って同定できないことが逸脱的と考えられる）を示す応答がいずれも「とか」によるマークを受けている。

概要的にならざるを得ないが，ここまでの議論は次の表 1 のように整理できる。

表 1 「とか」でマークされる引用と，それに先行することがら

	先行することがら	後続することがら（「とか」でマーク）
データ 1	「24 時間ずっとやってるよ」 店の営業時間に関する事実	「なんで :?」 事実，一般的なことに関する疑問（通常は問われるはずのない疑問であり，それを問うことが逸脱的）
データ 2	「もともと太ってる子じゃないのに」 話題の人物に関する認識	「なんか痩せた :」 語り手の認識から逸脱する報告
データ 3	「ヒッティングパートナーみたいに打ってたらさ」 クラブの活動として通常の事態	「大津さんがやってんのかと思った」 語り手の認識から逸脱する見解
データ 4	「ここ住んで生まれ育ったのに何やってんの わかんないの」 深く関わっているはずの地域についての期待される認識	「知らない あすこの嫁さんなんか知らない 見たことない 聞いたことない 会ったことない」 期待に反する返答，強調された形式 「なんとかさんちの嫁さんだよ」 通常の認識，あるいは人物同定の経路（それを相手が持っていないことが逸脱的）

ここまで，物語における「とか」でマークされる引用が，物語の中でどのような位置づけを与えられて出現しているのかを見てきた。いずれも，物語の時系列的な推移に沿って，事実や通常期待されることがらが先行する位置に配置され，それに対して逸脱的な内容が登場人物によって発話されたことが再現される時に「とか」が用いられていた。こうした「とか」の用いられ方は，先行研究において指摘された「卓立的例示」の一種であると考えられる。

5. 議論

4. において，物語の語りにおける「とか」による「卓立的例示」は，物語における出来事の推移に沿って，時間的・因果論的に前提と帰結の対になることがらが配置される上で，先行する通常のことがらに対し，後続する逸脱的なことがらを際立たせていることを論じた。本節ではさらに，このような前段と後段の配置が，「とか」に限らず一定の汎用性を持つ構造であること，「とか」はその構造を実現する一つの手段であることを議論する。

Sacks（1992）は，want や thought などある種の動詞（第一動詞，first verbs）は，物語の中で語り手の予想を提示しつつ，そこで話は終わらず，それとは異なった帰結が語られることを予測可能にしていると述べている（vol. 1, pp. 181–182）。平本（2011）はこれを踏まえ，日本語では話が終わらないことは文末形式に担われ，動詞は主に出来事の内容が予想と違ったことを投射する働きを担っていると論じている。

本研究で検討したデータにおいては，物語の時間的経過を示す接続表現が用いられる場合が多く，平本の指摘の通り，物語の途中においては，まだ続きがあることが形式的に示されることが多いと考えられる。加えて，この途中の段階で提示されることがらに対し，終結付近で提示されることがらはなんらかの逸脱的な位置づけを与えられていることを見てきたが，この位置づけの理解可能性には，「とか」による卓立が関わっていると考えられる。

では，そのような役割を担いうる文法要素が，ここではなぜ「とか」なのだろうか。天野（2001）は，「卓立的例示」とは「評価の際立ったものが集合として想定され，その一部例示（p. 105）」がなされる用法であるとしている。これをデータ 1 および 3 のような直接引用における「とか」に基づいて考えると，その状況で産出しうる発話の集合の一部例示を行うということになる。一方，物語は過去に遭遇した一連の出来事を時系列的に再構成するものであり，その中に生じる直接引用は，無論その通りにはならないにせよ，実際にそのように発話したと聞くことができるような特徴づけを伴って再現されることが想定される（臼田 2019 参照）。そうであれば，「とか」を伴う直接引用は，語られている出来事が実際に起こった時点で実際にそのように発話されたとは限らない，不正確な引用であることが刻印されているといえる。実際には物語の中に生じる直接引用は常に不正確な引用であることが普通であると考えられるが，それをあえて刻印することで，「とか」は当該発話の一言一句ではなく，その発話が表出しうる行為や態度の表出が指向されていると考えられる。

加えて，「とか」によって引用された発話は不正確であることが刻印されている一方で，直接引用であることによって詳細なディテールを伴い，それだけ豊かな表現になっている。また具体的であることにより，発話の音調，言葉の選び方やモダリティ要素，身体表現などの多くの情報を伴っている。こうした特徴は物語におけるパンチラインにおいて頻繁に生じるものであり，当該行をパンチラインとして評価されうるものにしているものである。つまり，そのような詳細さは，当該発話を，パンチラインとしての理解に相応するような特異なことがらを表出するものとして理解可能にしているものであるといえる。このことは言い換えると，「とか」は，不正確さによってその発話そのものが一語一句正確にそのとき発されたのかどうかは問題にせず，それらしき発話が背景に持つ行為や態度，状況といったものの特異性を指向する一方で，パンチラインに必要な豊かなディテールを引用発話に与えるという，二つのアンビバレントな課題を解決する手段になっているといえる。

こうしたことについて考えるため，次のデータ 5 を見てみたい。データ 5 は，親しい友人数人で食事中の会話の一部である。A がレストランに着くまでに電車で遭遇した出来事について語っている。断片の直前までの部分では，幼い子供を連れた男が子供を肩車したまま電車に乗ろうと

して，子供を電車のドアの梁に強打したということが話されている。断片はその語りの続きである。-> を付した行では「とか」を用いて，A が遭遇した出来事の登場人物である「お父さん」および「お母さん」の発話が引用されている。

データ 5［会話 ID: C001_001 284.727 秒 –302.412 秒］

1 A きょうなんか子供で思い出したんだけど .h
2 D うん
3 A あ：の：(0.2) 吉祥寺で乗り換えして： [井の頭線乗る時に：なんか [ほんとにまだ二歳
4 D [うん [うん
(0.6)
5 A まあ 二歳 なってるかな：
6 D うん .
7 A まあもう歩ける子なん [だけど ちょろちょろ ちょろちょろしてて :.
8 C [うん .
9 D うん .
10 A で ま ちょろちょろ ちょろちょろしてるから：お父さんが：(0.5) 肩車してあげたのね :?
11 C うん
12 E huhu
13 A で (0.3) 絶対：(0.4) [なんかやな [予感がする：っ h て h す h ご h い h お h も h っ h
[た h の h:hhh .hh
14 D [hu [ahahahahahahaha
[わ h かっ h た h
15 C [hahahahahahahahahaha
16 E 何 :? [わかんない .
17 C ( ) [電車に乗る時？
18 A [そし [たら： [電車 [乗る時に [: 思い切り [がんて [聞こえて：
19 B [え ::
20 D [うん [( ) [あー
21 C [いや :h:h:h:h [いや :: [恐ろしい :.
22 E [あ： [あ :::: [ひど：い .
23 B [あ :hhhhhhh
24 E ひど：い .
25 D やだ :.
26 C い [た – 痛い 痛い 痛い 痛い 痛い .
27 A [< うわ > ーっ [て泣き始めて :。((両手を肘前から顔の高さまで上げ，「わ」で手を開く))
28 D [あ :::::: [::

29 E [そりゃそうだよね：.
30 B ssshhhh [hh
31 -> A [で おか [あさんがうそでしょう？とか [言っ h [て h hehehehh
32 B [お父さん.
33 D [hhha [hahahahahahaha
34 E た h [し h か h に h.
35 -> A [何やってんの：とか言って [hhh
36 D [やり s [o う でも お父さ [ん.
37 E [た：しかに [ひ [ど：い
38 B [お父 [さ：ん
39 > A [ね hh [うわ： ごめんとか言って.
(0.2)
40 A うわ： 男自分のことしか考 [えてな：いと思って：.
41 E [そうだね：もう
42 D [(考え) てな：い ほんとそうだよ [ね.
43 A [うーん.
(0.3)
44 D そうだよね.

データ 5 における物語において A は，子供の父親らしい人物が子供を電車のドアの上部に打ちつけるという特異な事態を提示したのに続いて，その事態の当事者の発話を引用して提示している。「とか」による引用は 31 行目，35 行目，39 行目に出現しており，それぞれ出来事の登場人物（「お母さん」および「お父さん」）の発話が「とか」によって引用されている。一方，その出来事を目撃した語り手自身の所感が述べられている 40 行目においては，引用マーカーは「と」が用いられている。

ここで注意したいのは，データ 5 において語られた物語全体において，明らかに際立ってセンセーショナルな出来事として提示され，そのように理解されているのは，「とか」による卓立を受けていない 18 行目および 27 行目だということである。つまり，単に物語の中で注目すべきことがらを目立たせる（「卓立する」）ことが「とか」の働きなのだとすれば，ここでは正しく作動していないか，誤った位置において用いられた，ということになるのだろうか。おそらくそうではなく，そこで提示されていることがらが「卓立的例示」にそぐわないから，というのが理由であると考えられる。

直接引用を「とか」によって「卓立的例示」できるのは，「とか」がもつ不正確さの含意によるものであると考えられる。一方，ある程度硬いもの同士をぶつけたときの擬音である「がん」や，急激に大きな叫び声が上がったさまの擬態である「うわー」といった語句は慣習的なオノマ

トペであり，ある具体的な出来事において実際に生じた音声を写し取ったものではなく，慣習的にそのような状況をその語句で描写することになっているというシンボリックなものである。したがって，その描写が不正確であるかどうかということは原理的に問題にならず，その記号があらわす状況でありさえすればよいということになる。そうなると，不正確さによって，当該の状況で生じうる潜在的な発話の集合から例を摘出することで，その状況のいちじるしさへの指向を示すという働きと折り合いが悪いように思われる。

6. おわりに

本研究では複合助詞「とか」が，複数の事物を列挙する並列用法ではない用いられ方をする場合に着目し，特に日常会話において参与者が，過去に経験したり見聞きしたりした一連の出来事を時系列的に語る「物語」におけるはたらきについて分析した。非並列用法の「とか」には,「評価の際立ったものが集合として想定され，その一部例示」がなされる「卓立的例示」という用法があることが指摘されてきている。本研究の分析では，物語の語りにおける「とか」による「卓立的例示」は，物語における出来事の推移に沿って，先行する通常のことがらに対し，後続する逸脱的なことがらを際立たせていることを見てきた。さらに,「とか」が直接引用をマークする際にそのような「卓立的例示」のはたらきをもつのは,「とか」が不正確な引用であるということを表示する文法要素であることに起因する可能性について論じた。

本研究で使用した転記記号

本研究では Jefferson（2004）が確立した自然会話の転記システムに倣って会話を文字に書き起こしている。本研究で使用した記号の一覧を示す。日本語会話への適用については西阪（2008）に依る。

(数字)	発話と発話の間，あるいは発話中の空白時間。おおむね数字秒分の時間が空いていることを示す。
(.)	おおむね 0.2 秒に満たないわずかな間
[	発話と発話の重なりの開始。重なりの終了が] によって示されることもある。
> 発話 <	相対的に速く発話されている
< 発話 >	相対的に遅く発話されている
h	呼気音。笑いを示すのにも用いられる。
.h	吸気音
=	隣接する発話が隙間なく連続している
:	延伸。長さに応じた個数が付される
-	発話が語句の途中で途切れている
?	発話末が上がる音調
¿	発話末が上がって下がる音調

↑　直後の音調が上がっている

↓　直後の音調が下がっている

¥ 発話 ¥　呼気音は明瞭でないが，笑っている声色で発話されている

° 発話°　小さい声で発話されている

(発話)　聞き取りが不明瞭な，小さい声での発話

((説明)) 発話以外の転記者による補足説明

参照文献

天野みどり（2001）「若者ことば：銅メダルとかとった（特集 2「少年」の現在）」『東西南北』2001: 100–107.

Garfinkel, Harold (1967) *Studies in ethnomethodology*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall Inc.

平本毅（2011）「「フリ」による「オチ」の投射：会話分析によるアプローチ」『フォーラム現代社会学』10: 148–160.

平本毅（2018）「会話分析の広がり」平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実（編）『会話分析の広がり』1–33．東京：ひつじ書房.

洞澤伸・奥村佳奈（2015）「若者言葉「とか」の強調用法について」『岐阜大学地域科学部研究報告』37: 1–17.

Jefferson, Gail (1978) Sequential aspects of story telling in conversation. In: Jim Schenkein (ed.) *Studies in the organization of conversational interaction*, 213–248. New York: Academic Press.

Jefferson, Gail (2004) Glossary of transcript symbols with an introduction. In: Gene H. Lerner (ed.) *Conversation analysis: Studies from the first generation*, 13–31. Amsterdam: John Benjamins.

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香（2022）「『日本語日常会話コーパス』の設計と特徴」『言語処理学会第 28 回年次大会発表論文集』2008–2012.

劉暁傑（2011）「ぼかし表現「とか」についての考察」『相愛大学人文科学研究所研究年報』5: 48–35.

Mandelbaum, Jenny (2012) Storytelling in conversation. In: Jack Sidnell and Tanya Stivers (eds.) *The handbook of conversation analysis*, 492–507. West Sussex: Wiley-Blackwell.

森山卓郎（1995）「並列述語構文考―「たり」「とか」「か」「なり」の意味･用法をめぐって―」『複文の研究』127–149．東京：くろしお出版.

中俣尚己（2008）「日本語のとりたて助詞と並列助詞の接点―「も」と「とか」の用法を中心に」『言語文化学研究』3: 153–176.

西阪仰（2008）『分散する身体：エスノメソドロジー的相互行為分析の展開』東京：勁草書房.

Sacks, Harvey (1992) *Lectures on conversation Volume 1 & 2*. New Jersey: Wiley-Blackwell.

Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50(4): 696–735.

Schegloff, Emanuel A. (2007) *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

住吉紅実（2015）「「とか」の機能的分析」『英語学英米文学論集』41: 63–79.

砂川有里子（1987）「複合助詞について」『日本語教育』62: 42–55.

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味 III』東京：くろしお出版.

臼田泰如（2019）「会話における演技に関する会話分析的研究」博士論文，京都大学.

臼田泰如（2021）「態度をほのめかす例示：日本語引用表現「みたいな」の分析」『国立国語研究所論集』20: 149–169.

山下悠貴乃（2017）「配慮表現としての「とか」について」『筑波大学地域研究』38: 127–138.

大和啓子（2010）「「とか」による例示について」『筑波応用言語学研究』17: 17–27.

Inaccurate Quotation: Structuring Telling with Complex Particle *toka* in Japanese Everyday Conversation

USUDA Yasuyuki

Shizuoka Institute of Science and Technology / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

This study examines a type of Japanese complex particle *toka* in storytelling, in which participants narrate a series of events that they experienced in the past in the chronological order, in everyday conversation. Traditionally, *toka* is used to enumerate similar things parallelly. The literature points out that it is also used for marking a salient object by picking up an example from a set of excellent things with similar characteristics. In this article, some examples of the "salient exemplification" in storytelling are selected from *the Corpus of Everyday Japanese Conversation*. The result is as follows. *Toka* used as a marker of "salient exemplification" is often seen in storytelling. As the story progresses, *toka* is used to emphasize the subsequent object against the previous. Moreover, the literal meaning of *toka*, that is, a display of inaccuracy, enables it to be used in the above-mentioned manner.

Keywords: storytelling, *toka*, quotation, everyday conversation, *Corpus of Everyday Japanese Conversation*